

「日本語日本文学論叢」第十六号 抜刷
令和三年二月十二日 発行

正岡子規『七草集』所載漢詩文読解贅説

柴田清繼
小池恵
武村圭笑

正岡子規『七草集』所載漢詩文読解贅説

柴田 清継・小池 恵・武村 圭笑

はじめに

本稿は、二〇一九年度、武庫川女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻の授業科目「漢文学研究」で行った、担当教員と受講学生とによる共同研究の成果である。

『七草集』について、『子規全集』第九巻巻末の渡部勝己の「解題」により、基本的な事柄を押さえておきたい。

（正岡子規は）明治二十一年二十二歳高等中学校在学中、夏休みに松山に帰省せず勉強のために「閑静なる地を墨江に卜し」（中略）、向島須崎村（現在 墨田区向島須崎町）の宝寿山長命寺門前の桜餅屋、山本屋の二階に仮寓した時に「蘭之巻」から「あさかほのまき」までの五篇と「かる萱の巻」を書き、その年の終わりに「葛之巻」、翌二十二年四月に「瞿麦の巻」を書き足し、「かる萱の巻」をはずして秋の七草の名を篇名として一冊に纏めた。^{注1)}

各巻は、和歌（をみなへし乃巻）・俳句（尾花のまき）・謡曲（あさかほのまき）・論説文もしくは随筆（葛之巻）というように、すべてジャンルが異なっていて、作者の幅広い文才が示されている。うち、冒頭に配置されている「蘭之巻」、「萩之巻」は、それぞれ漢文、漢詩の作品集となっている。再び渡部勝己の「解題」によれば、「子規は『七草集』本文のうしろに、予め白紙を五十枚綴じ込んで師友の回覧に供しその批評を求めた」。この批評中、漢文で書かれたものが少なくない。

以上のように、『七草集』には、師友の批評文も含め、漢文で記された部分が一定の割合を占めているのだが、夏目漱石による批評の部分以外は、ほとんど後世の人による解釈が施されていない。いずれもさほど難解なものでもないのに、不必要との誹りを受けるかもしれないが、あえて本稿で『七草集』の漢文の部分の筆者なりの解釈と言っても基本的に訓読だけだが――を提示することにした。

底本とするのは『子規全集』第九卷（講談社、一九七七年）所収の『七草集』である。「蘭之卷」、「萩之卷」のいずれも作者自身の推敲前の字句や回覧した人たちの書き込み等が、組版上の工夫等により、非常に詳細に反映されているが、本稿で訓読するのは、作者が推敲改作した後の本文（九ボ活字の部分）のみである^{注②}。「萩之卷」に収められた漢詩作品は、その後には作つた多くの作品と合わせ、何度もの推敲を経て、後に「漢詩稿」一冊として綴じて残された^{注③}。この「漢詩稿」とその渡部勝己による「書き下し文」が『子規全集』の第八卷の方に収められている。この「漢詩稿」における作品の字句と照合してほとんど変化がなく、且つ渡部の訓読にも問題がないと判断した作品は、本稿では取り上げなかった。取り上げた作品については、『子規全集』第八卷「漢詩稿」における作品とその「書き下し文」の掲載頁を「↓」の後に付記した。批評文のうち、前述の夏目漱石による批評文については、先人の解釈がある^{注④}ので、本稿では取り上げなかった。批評者は各人、号など本名以外の名で自称しているが、本名もしくは一般的な呼称が判明しているものは、最新の研究成果と思しき和田克司編『子規の一生』^{注⑤}の記載に基づき、それを付記した。

提示する訓読文について補足したい事柄や、作業の過程で気づき、記しておく価値があるかもしれないと思われた事柄を、「附記」として記した。

なお、できるだけ底本の作品及び批評文の字体を反映するため、筆者が利用できるフォントの範囲で、底本のそれと同一もしくは近似したものを打ち出すよう努めたが、完璧の域には至っていない。この点、ご了解を願う。

②（一）正岡子規『子規全集』第九卷（講談社、一九七七年）巻末の渡部勝己「解題」に拠る。（二）『子規全集』第九卷「凡例」。（三）『子規全

集』第八卷（講談社、一九七六年）の渡部勝己「解題 漢詩」（四吉川幸次郎「漱石詩集拾遺註注」（吉川幸次郎全集）第十八卷、筑摩書房、一九七〇年）、島森哲男「漱石「七艸集批評」注釈」（『宮城教育大学国語国文』第十五卷、一九八五年）等。（五）和田克司編『子規の一生』（増進会出版社、『子規選集』第十四卷、二〇〇三年）「第二部 正岡子規年譜」一四六頁。

一 蘭之卷

墨江橋居記

戊子ぼしの夏、例に従ひて暇いとまを得ること六十餘日。學友は多く歸郷せり。留とどまる者は、或いは牛込に在り、或いは王子に在り。而して余は則ち墨堤の月香樓に寓す。同じ居る者は三並・藤野の二氏なり。樓は墨堤の第一に曲がる処ところに在り。長命寺を負ひ、牛島の祠ほこらに鄰となる。堤は高さ一丈、恰も樓と齊ひとし。車馬喧しく擾わづらはし。樓前に樅もみ・梧あをぎり・檜ひのき・橘かしの数樹有り、僅かに塵埃ちんあいと隔たるのみ。而して疎枝細葉の間に猶ほ能く碧流の日光に掩映えんえいするを見る。余は腦を病み、眠ること遅く起ること蚤はやし。起きて未だ衣を換へず、窓を開きて望めば、曉風 霧を吹き、漠乎として際無く、前岸辨べんす可からず。心気清愴せいせうとして久しく視るに堪へず、乃ち凭倚ひよりいして書を読み、未だ曾て病の身に在るを知らざるなり。倦うめば則ち頭かぶを回めぐらして目を挙げれば、江風 涼りやうを分かち、白帆 樹間に出没す。熱きこと都巷とかうに減げんぜざれども、涼意多きを覚ゆ。長日も漸ややく暮れ、涼月 水に在り。四境 岑寂しんせきとして、江を隔てて鐘声を聞く。是に於いてか、悠然陶然として、身 羲皇以上ぎくわうに在り。居ること十数日、雨暁風夜、一として意に適かなはざるは無し。夫の都人士かの此この地に來りて花を折り雪を觀みて以て天下の絶勝と爲なすが若きは固もとより与かり知らざるなり。同窓の友五六、時に小艇に乗りて余が寓おとを訪ふ。相延ひきて樓に上らしめ、茶に當つるに櫻花湯を以てし、果に當つるに櫻葉糕あうえみかうを以てし、共に墨江の風致を話す。余 前人未だ得えざるの趣を説き、喋々として已やまず。之を頃しほらくするに友の京に留まる者、四方に往き、而して三・藤の二氏も亦尋たいで去る。余が寓 是れより剝啄はくの声無し。乃ち閑行して勝を採

り、社寺はくじしよ尽く詣まうで※、田隴でんろうも備つぶさに究きむ。斯かくの如ごとくすること又十餘日。形と氣と和し、心と境と合す。始めて前の人を待ちしを悔い、今の独りぼしい擅しんにするを樂しみ、自みづから心に得る有るも筆 尽くす可からず。

【附記】※の部分の原文は「杜寺尽詣」。中国語の「詣」には、「(杜寺に)参拜する」意味はないが、文脈に応じ、「まうづ」という国訓で訓じた。

小景を記す 一

早く起きて竹扉を出づれば、関げきとして人無く、白霧 江上を掩おほひ、渺々べうべうとして大海の如し。孤鳥 忽たちまち飛び、渡舟 行く所を知らず。徘徊はいくわいすること少時、對岸漸く現る。潮 徐おもむろに上がり、波 動かず。一天 風 死し、涼氣 肌を襲ふ。今戸の街、待乳の岡は、猶ほ眠れるが如く、茂林と人家と皆画裡ぐわりに在り。偶たまたま好句を得、推敲するも未だ成らず。紅暎こうとん 東に上り、四面 霧 全く消え、遙はるかに富山の突兀とつとつとして金龍塔の梢はじに掛かるを見るのみ。

小景を記す 二

楼前の堤上に小亭有り、行客休憩する処なり。日僅かに午を過ぐるや、烈炎 金を鏢とかし、凡きに凭よるに堪へず。乃ち來りて烟たばこを喫すひ、水を嚙かじる。涼風 樹を揺らし水を蕩うごかし、蟬せんでう 雨の如く、心腸を洗せん滌でし、腋えき下に秋生ず。忽たちまち客の京市きやうしより到いたる有り、擔にものを卸し余に謂いひて曰いはく、「今日 都巷は、酷熱 焼くるが如く、馬牛 道路に喘あへぎ、簪しん纓えい 公衙こうがに苦しむ。眞まことに市人をして地獄に墮落するの想おもひ有らしむ」と。

小景を記す 三

我 墨江の光景を視るに熟せり。曙光は朗晴にして、空しく一塵も無し。清きことは則ち清けれども、未だ暮色めいめつ明滅し、見る

所無きに至りて而して万化と冥合するに如かざるなり。炎陽 威無く、將に落ちんとす。水光 激澗として、金波 人の目を射る。淡涸抹林※ 水を籠め、櫻柳の間に搖曳し、鐵橋の上に連延す。芙蓉峯の色は、蒼然として画の如く、彩雲 絢爛として其の上頭に繚繞す。西を顧み東を望み、玩弄して措かず。紅 消えて 漸く淡く、々きこと極まりて暗し。瞑目直立し、去ること少時なることも能はず。

【附記】「淡涸抹林」直前の「水光激澗」から、人口に膾炙した蘇軾の「飲湖上初晴後雨」其二の詩句を意識した表現になっている。もつとも、「抹林」は、夕陽に赤く染められた林と解すれば、蘇詩と関連付けられるが、「涸」は「しづむ。おちる」、「川の名」、「水の流れるさま」を表す語である（『大漢和辞典』巻六、一〇八二頁）から、ここにはなじまない。この「涸」は「涸」の誤りと見るべきこと、疑いの余地がない。

小景を記す 四

朋の城中より到る有り。来るに必ず暁を以てし、帰るに必ず夜を以てす。而して余は必ず之を送り、送りて枕橋に到れば則ち還る。蓋し墨江の風光は、北は梅祠に窮まり、南は枕橋に尽く。北は則ち沈寂にして、只だ堤と流れと睽くのみにして、蕭索たるを免れず。寓より枕橋に至るまでは、最も清麗なり。只だ行人續然たるを嫌うのみ。而るに夜は則ち閔然たり。已に送りて還るとき、夜色 燈を罩め、月影 林に在り。水波 音有り、惘然として倚る所無きが如くなれども、胸中 空潤なり。徘徊して行くを忘れ、直立して止まるを忘る。名と利と懷に忘れ、物と吾と世に忘る。既にして寢に就けば、墨江の夜色 目睫に彷彿たり、終に忘る可からざるなり。

小景を記す 五

書を読みて半夜に至るも、睡 未だ催さず。蚊声 雷の如く、危坐するに堪へず。乃ち起ちて蚊帳に入れば、鐘声 水を渡り

て嗚々たり、犬の吠ゆること江を隔てて猶々たり。風の遠くして微かなる有り、漸く來りて庭樹を吹く。梧 戦ぎ 樅 動き、細波 岸を打つを聞く。忽ち烏々たる声を聞く。耳を敬つれば漸く近く、窓前に至りて、聲調 嘹唳たり。乃ち其の漁歌なるを知る。槽声 咿軋として、雁の鳴くが如く、人をして悄然たらしむ。起ちて窗を開けば、江月 流れに印し、前岸 烟の如く、只だ一燈の波に浮かびて去るを見るのみ。

小景を記す 六

晴好を見るも雨奇を見ずんば、則ち濃抹の美を知りて、淡粧の妙を知らざるなり。墨江の記には、亦雨景も無かる可からざるなり。※夫れ天陰り慘怛たるの日は、岸頭の樹を蔭ひて、独り眺望の奇を擅にし、自ら以て墨江は是れ我が有と爲すも、忽ち見れば冷風颯然として至り、雨絲 横に吹き、江波 瀆きて白くなり、塘樹 緑を駭し、真土の岡と竹家の津と、恰も僻村 曠野の景の如く、水流 濁りて急なるは蓋し或いは市井万丈の紅塵を洗ふ爲ならんか。

【附記】※印までの部分を、池澤一郎氏は「晴れて好きを見て、雨の奇なるを見ざれば、則ち濃抹の美を知りて、淡粧の妙を知らざるなり。墨江の記も亦雨景も無かる可からず。」と訓じておられる（「正岡子規の漢詩の小説的結構と「写実性」について」、『国文学研究』一八〇集、二〇一六年）。以下の部分の意味を筆者は「墨江の記には雨の景色について述べること、不可欠だ」と解するのに対し、池澤氏は「蘇軾の詩と同じように）我が墨江の記も、雨の景色について述べる事が不可欠だ」と解されたわけである（傍点筆者）。いずれも可か。

二 萩之卷

墨江僑居雜詩其一 ↓ 第八卷一三九頁（書き下し文三〇五頁）

暇を得たり 三句の久しき、閑栖す 墨水の頭。鐘を敲く 林際の寺、箔を捲く 水辺の樓。何れの処にか名妓を巾はん、
于今は白鷗有るのみ。一笈 古迹を探れば、遠邇 暮光に愁ふ。

其二↓第八卷一三九頁（書き下し文三〇五頁）

茅屋長堤の下、寓居百慮清し。芦深くして鷗の睡るを護り、風順にして舟の行くに利す。耳を洗ふ塵埃の迹、江を隔つ車馬の
声※。茂林待父より高く、相映じて水中に明らかなり。

【附記】※印の二句の原文は「洗耳塵埃迹、隔江車馬声」「洗耳」は『大漢和辞典』に「けがれた事を聞いた耳をあらひ清める。
堯が許由に天下を譲らうとしたのを許由が聞いて耳を洗つた故事。俗世間のことを汚はしいとする意。」と説明されている（巻
六、一〇八九頁）。また、この二句、改作前は「流れに臨んで独り塵埃の迹を洗ひ、岸を隔てて車馬の声を聞かず」である。以
上二点から見ると、やや大げさの感もあるものの、己が隠者的な生活をしていることを言おうとしたものと考えられる。緩い
が、一応対句になっている。

其七↓第八卷一三八頁（書き下し文三〇四頁）

【附記】第一句「病軀未得四翔翱」は「漢詩稿」では、「軀」が「軀」に変わっただけで、これを「病軀未だ得ず四もに翔翱するを」
と訓じる渡部の「書き下し文」には問題がないが、加藤国安氏が初めの二字を「病軀して」と訓じられた（『子規蔵書と『漢詩稿』
研究』（研文出版、二〇一四年）一九一頁）のは、「病軀にして」の誤りだろうか。

其九

【附記】底本詩句末尾の原注「茅」は、「第一」の誤りであること明らかである。注記がなされてしかるべしと思う。

二州橋觀煙火戯↓第八卷一四一頁（書き下し文三〇六頁）

【附記】題の「煙火戯」を渡部は「煙火の戯」と訓じている。言葉の綾として扱うなら、それでも問題はなからうが、「煙火戯」は『日本国語大辞典』にも「えんかき」という読みで載り、我が国の『玩鷗先生詠物百種』（一七八三年）の用例も挙げられている（『日本国語大辞典』第二版第二卷七三〇頁）語である。分割せず、一語として扱うべきだろう。なお、この語は和製漢語ではなく、中国由来だと思われる。明の瞿佑（一三四一〜一四二七）に「煙火戯」と題する七律（『御定佩文齋詠物詩選』卷二二一）がある。同じ花火でも、中・日という空間の隔たり、及び時間の隔たりに応じて、その内実に一定の相違のあることが想定されるが、次のような「煙火戯」の詩句を見る限り、さほど大きな隔たりはないようにも思われる。「天花無數月中開、五色祥雲繞綵台。墮地忽驚星彩散、飛空頻作雨声来。怒撞玉斗翻晴雪、勇踏金輪起迅雷。更漏已深人漸散、鬧干挑得防燈回。」

墨江流燈会↓第八卷一四〇頁（書き下し文三〇六頁）

第三、四句「燈映疑浮鳥、水明驚伏鱗」（『漢詩稿』も同じ）を渡部は「燈映じて 浮鳥疑み、水明らかにして 伏鱗驚く」と訓じているが、「燈 映じて 鳥 浮かべるならんかと疑ひ、水 明らかにして 鱗 伏せるに驚く」と訓ずべきだと思う。燈火が水面に映り、水面に映ったその燈火がまるで水面に浮かんだ鳥であるかのように感じられ、燈火に照らされて明るくなった水面越しに、水の中で泳いでいる魚が見えて、びっくりしたの意である。

三 批評

①二六五〜二六六頁、笑天道士評 笑天道士は大谷是空

第一卷蘭之卷

何れの處か山無からん。何れの處か水無からん。何れの處か風月の清涼明潔にして永州の山水及び赤壁の如き無からん。風月は唯柳々・蘇東二氏の筆を得て踰る。夫れ山水を觀るは猶ほ書を読むがごとく、其の見の高下に随ふ。此の卷の「墨江の小景を記す」の如き、筆々煙嵐風霜を帶び、且つ神奇灑脫の情を盡くす。所謂情景共に至る者か。墨江の山水風月は未だ必ずしも柳々・蘇東を必要とせざるなり。

第二卷萩之卷

盡く瀟洒の光景を寫し、且つ耳目の感を寄す。佳聯統出し、精緻の巧を極む。中んづく向島竹枝の如きは、多恨多情、未だ余が今拙詩を記し此の卷を評するに当たたる可からざるなり。

嚴然として未だ柴関を掩ふを用ゐず※。朝暮涼を逐ひ幾たびか往還する。樹下の茶鐘 俗事を忘れ、楼上の書読 清閑を占む※。槽声 暁を破る 橋場の月、煙雨 昏を涵す 真乳山。此の楽しみ 此の景 君閑し去り、層々浮かべ出だす 筆硯の間に。

第五卷

予未だ能を知らず。故に此の卷は読み去り読み来るも評する能はず。只だ君の能博きに驚き、深く予の不能を慚づるのみ。呵々。

【附記】※印の句の原文は「嚴然未用掩柴関」。嚴重に扉を閉めておく必要はないという意味を表現したいのだから、それならば、平仄は別として、「未用嚴然掩柴関」としなければならぬ。※印の句の原文は「楼上書読占清閑」。「書読」は、やはり動詞＋目的語という通常の語順を崩さず、「読書」としなければならぬ。目的語＋動詞の順で成立している語もあるが、「書読」は未だそのような語にはなっていない。「書を読む」の意が「書読」と表現されている例もないわけではないが、それは相応の条件があつて初めて許されることである。例えば陸游晩年の「対鏡」と題する詩に「書読常終卷、山行亦却扶」（書を読むには常に卷を終へ、山を行くにも亦扶ふるを却る）という二句があるが、これは、動詞＋目的語の構造であるにもか

かわらずすでに一語として成立し得ている「山行」の語と対にしたから、許されるのである。

②二六六頁、自笑仙史評 自笑仙史は誰か不明。

七草は各おの其の趣を異にし、或いは勁拔、或いは綽約、景において情において筆を弄すること自在、実に墨堤一幅の画図なり、人をして其の境に在り其の事に觸れしむるが如し。ああ詞兄の風流才子の罪は、死して地獄に墜ちざるを得じ※。

【附記】※印の句の原文は「不得死而不墜地獄矣」。これでは、「死ぬことができず、地獄に落ちないだろう」か、あるいはその他の意味になってしまう。「不得不死而墜地獄矣」という語順でなければならぬ。

③二六六頁、採花弄史評 採花弄史は佐々田八次郎

墨堤幽邃の情、閑雅の趣をば巻中の一編に掬ひ得るの七草集は、能く余をして情を七草園中に遊ばしむるを禁ぜざらしむ。余の東道主人と爲る者は夫れ此の編か。

朝貞之卷

余はこれを知らず。故に評する能はず。読み去り読み来りて、只だ忙然自失し、君の博聞に驚くのみ。

④二七一頁、勢海青竜評 勢海青竜は細井岩弥

天の人に賦ふる、何ぞ其れ均しからざる。余之を疑ふこと久し。今莞爾少年に於いて益ます之を見るなり。蓋し人は各おの天授の明鏡有り。本心即ち是れなり。是の鏡を蔽ふ者、其の数多し。則ち人間の妄想なり。其支枝也※能く其の妄想を断つ者は天下に鮮なし。蓋し莞爾少年は其の一人なるかな。少年は能く其の賦与の鏡を研ぐ者か、将之を已※の明々皎々に受けたる者か。吾其の切磋の功是に至るを知る。少年は能く諸根を断ち、其の本体を得。故に萬物の反射に一遺も無きなり。七草

集に載る所は、其の趣異なり、其の言も亦同じからず。蓋し能く七草の性情を尽くすと謂ふ可き者には、或いは少年を目するに妄想の中心に沈む者を以てするもの有らんも、余は敢へて之を取らず。ああ、君の明鏡は能く萬象を反射し、君の精識は能く之を編出し、君の頭脳は能く之を消化し、君の手、君の筆墨は能く之を導く。蓋し筆公も亦昔日の毛穎氏に非ず、髭有り髯ほほひげ有ること明らかなり。已に七艸集を読み、巻を閉ちて靜かに思ふ。僕の妄想を以て君の本体を評す、其の笑ふべき當あただに一のみならざる可し。

辱知 勢海青竜拜評

〔蘭の卷〕少年の文は、蓋し柳・欧を一白に投じ、能く之を丸めし者なり。是の故に柳と歐と一人にして来り、以て共に談かたるを得可し。然れども若し各おの独一にして来らば、余 其の一技を避けざる可からざるを知るなり。

〔萩の卷〕詩は物茂卿に法のつとる者か。皆深遠より来りて淡泊にして、別に勇爽の状無し。蓋し應まさに莞爾老翁の作なるべし。其の自ら少年と云ふは、甚はなはだ奇なり。然れども焉いづくんぞ其の知命の老翁の更に少年たるに非ざるを知らんや。

〔他卷〕少年は詩を能くし文を能くし歌を能くし、多芸たげいの秀才なり。薺あさかの卷の如き、特に其の工たくみを見るなり。試みに天女を雇ひて来り、此の一段を語らしめば、聽く者をして精神靜沈默落し、身の一幽靈たるを知らず、而して白壁図大入道、林下 火玉出で、足下 烟生じ、凍冷なるの手、其の身を引き、一暗黒幽邃なるの地に誘ふの思ひ有らしめんや明らかなり。

辱知 青龍妄評

【附記】※印の「其支枝也」を筆者は解しえない。やむを得ず、原文のままにしておく。※※印の「已」は「己」の誤りに違ちがいがない。

【附記】すでに渡部勝己『正岡子規の研究 漢詩文と周辺の人びと』（青葉図書、一九八〇年）一五二頁に訓読文がある。

⑥二八〇～二八二頁、千舟居士評 千舟居士は河東静溪

【附記】すでに前掲の渡部勝己『正岡子規の研究 漢詩文と周辺の人びと』一五三頁に訓読文がある。ただし、「班」を「斑」に作る。

⑦二八一～二八三頁、蟠松狂夫髦評 蟠松狂夫髦は武市雪燈

盲者をして五色を判ぜしめんか。天地茫茫ぼうぼうとして、唯是れ暗黒なるのみ。何ぞ彼の青黄と紫紅とを識らんや。髦賦性篤鈍どどん、淺識無學、胸中即ち是れ盲なり。焉くんぞ亦能く七草の艶麗えんれいなるを弁ぜんや。然れども辱かたじけなく拜誦するの榮を得たり。豈あに其の芳情に深謝せざる可けんや。諺ことわざに曰はく、「盲者は蛇を恐れず」と。敢へて思ふ所を妄言し、謹んで璧たまを還さんも、必ず黄を指して紅と爲し青を指して紫と爲す者有らん。深く咎とがむる莫くんば則ち幸甚々々。

蘭卷

墨江僑居記

先づ月香楼に寓するを説くは、次に楼の景勝を叙べ、中間に朝々暮々觀る所の景・觸るる所の感を陳べ、終ふるに人を待ちしを悔いて獨り遊ぶを之樂しむの論を以てする所以なり。結局・情景併せ得て、波瀾層々たり。

小景を記す 一

暁色模糊もこたるの状を写し出だし、宛然えんぜんとして見ゆるが如し。

又云ふ、讀みて「富山の突兀として金龍塔の梢に掛かる」の句に至りて、躍然として起ちて舞ひ、覺えず快哉くわいさいを呼ぶ。

小景を記す 二

先生の健腕も亦炎熱の爲に疲れたるか。

又云ふ、先生の改刪批評 頗る我が心を得るに服す。

小景を記す 三

軽々として叙べて去きて、難渋するの体を見ず、無限の妙味 存す。才思 驚く可し。

小景を記す 五

之を読まば則ち 身 深山幽谷の裡に在るが如し。何等の清絶ぞ。

小景を記す 四

讀みて此に至りて、明花皎月の狂風痴雲の乱す所と爲るを覚ゆ。

小景を記す 六

痴雲漸く霽れて 月 光を漏らし、狂風忽ち收まりて 花 容を改む。

之を総じて子規は詞藻富瞻にして、筆端に花生ず。何ぞ字句の瑕瑾を問ふに暇あらんや。之を磨くに歳月を以てせば、韓・柳・歐・蘇の堂に到ること難からず。勉めよ。

又云ふ、余始め此の巻を讀みて、以爲へらく深く賞するに足らざるなりと。再び讀むに及んで、則ち少しく佳味有るを魁ゆ。三たび讀みて、則ち大いに驚きて曰はく、「真に錦繡の文なり。余何ぞ誤ることの甚だしき。」と。誦讀すること再四、遂に書きて曰はく、「奇思燦爛にして、文情秀拓なり」と。

萩卷

僑居の作十四首中、其の第六・第七・第十一・第十二及び第十三を以て上乘と爲し、而して第七首最も妙にして、第十三之に次ぐ。

附録は之を前集に比べ、大いに佳しと覺ゆ。殊に「次韻して竹鍊卿ちくれんけいに寄す」、「笑天道士じよに和す」の什じふの如きは難澁の色を見ず、流麗なること喜ぶ可し。何等の奇才ぞ。敬服す。

又云ふ、竹枝は則ち河東先生の評 之を盡くせり。復た髦輩たうはいの喋々するを須るんや。

葛卷

一篇の『東都地誌之沿革考』にして※、議論精詳、考証確実なること、言ふを必せず。軽々として筆を着け、平易流暢にして、
而も冗長に涉らず、能く的中たる。理義 腹に満つるが故に然らんのみ。感服す。

又云ふ、聞く 東都には清泉無く、玉川の水を引きて飲料に充つと。亦以て昔時三角嶋さんかくたうたりしの証と爲す可きか。

瞿麥卷

諸先生の評 之を尽くせり。敢へて蛇足を添へず。

妄言して至らざる所無し。死罪 万謝す。

明治二十二年九月廿二日夜

鶴鷓巢において

辱交

蟠松狂夫髦 謹識

【附記】※印の部分、「一篇の『東都地誌之沿革考』にして」とあるが、『東都地誌之沿革考』というタイトルの本が実在するわけではない。東都の地誌の沿革の説明としても十分な内容を備えているという意味での褒辞である。評語の一パターンであり、他にアトランダムに例を挙げるなら、清国から来日して明治十六年に新潟を訪れた王治本が新潟の今昔の地形上の変化を詠んだ一首に対して、小崎藍川が「一篇の『新潟沿革史』なり」と評している（王治本『舟江雜詩』第一首）。

⑧二八三頁、松窓小史評

松窓小史は竹村黃塔

余 前に既に蕪言むげんを題せり。子規今又余をして詩を題せしむ。乃ち二律を賦す。疎雑なること殊に甚だし。蛇足そその譏りは自ら甘んずる所なり。

門は長江を隔てて九街に對するも、琴書趣を成す小生涯。蘋莎水より抽でて平渚暗く、梧竹庭を陰くして古階冷ややかなり。禪榻ぜんたふ茶香病骨を醫し、秋燈詩味問懷※を遣る。七草托靈の筆を倩ひ来らしめたり、何ぞ識らん聲譽等儕を壓せんとは。

節を撃ちて人をして快哉を呼ばしめ※※、恍として疑ふらくは満卷綺綾堆きかと。只だ七艸に亘めて知己と喚ばしめんのみ、何ぞ啻に三紅をのみ秀才と称せんや。詩は梅翁を愛して遺響を接ぎ、文は曲叟を宗として新裁を出だす。欽うやまふ君藻思江海の如く、隻手能く衆美を攢め來るを。梅翁は梅暎を指し、曲叟は曲亭を指す。

明治二十二年十月念一日

松窓小史

【附記】※印の「問懷」は「悶懷」の誤りに相違ない。※印の句の原文は「撃節令人呼快哉」だが、平仄は別として、「令人撃節呼快哉」（人をして節を撃ちて快哉を呼ばしめ）とするのが正しい。

おわりに

研究者の方々からは不必要との誹りを受けるかもしれないとの危惧が今も脳裏を去らないが、一般の読書家の方々や学部の方学生さんたちには何らかの参考になるかもしれないと期待しつつ、擱筆することにする。

(しばた・きよつぐ 本学名誉教授)

(こいけ・めぐみ 本学大学院生)

(たけむら・よしえ 本学大学院生)